

## 主 題：神の国が来る。備えは？

聖書箇所：ルカの福音書 17章22-37節

今日のテキストはルカの福音書17章22節のところからです。これまで私たちはマタイの福音書の13章から、イエスが語られた「たとえ」を見て来ました。初めに学んでことは「主のみわざが為されるときには必ず敵による惑わしのわざが為される」ということでした。神の働きが為されるときには必ずそれを邪魔する働きが為されるということです。ですから、私たちはどんなときにも惑わされないために、しっかりと真理である神のことばに立ち続けることが必要です。それが自分自身を守る術であると見ました。

二つ目に見たのは、神が備えてくださった福音はあなたにとって、あなたのすべてのものよりも、そして、あなた自身よりも「価値ある宝か」どうかを問われました。すべてのものを捨てて主に従うことを選択するかどうか、それが救いを得るかどうかに関わっているということです。もし、イエス以外に宝とするものがあるなら、救いをもう一度考え直さなければならないということでした。ですから、イエスを信じたあなたにとってこの福音がこの救いが最も大切なものであると、あなたはどのように捉えているはずですか。あなたがどのように思えるのは神の愛が分かったからです。そして、それゆえに、あなたが神を愛しているからです。

神を愛しているから私たちが望むことはただ一つです。この神のすばらしさが私たちを通して何とか現れて欲しいと、だから、ひとり一人は神の栄光を現すために生きようとするのです。それが私たち救われた者たちの人生の目的です。何を、いつ、どこですると、そのようなことに関係なく私たちは、私たちが救ってくださり生まれ変わらせてくださった神のすばらしさが何とか私たちを通して現わされてほしいと、そのことを願いながら生きるのです。だから、私たちはみことばを学んでのみことばの真理に従おうとするのです。ゆえに、私たちは神が喜ばれることは何かを考えてそれを選択しようとしません。そのような歩みが神の栄光を現す歩みだということを知っているからです。

同時に、私たちはこうして生まれ変わったなら、イエスに早くお会いしたいという願いをもって生きる者と変えられました。間違いなく、イエスを信じている皆さんは主が戻って来てくださること、あなたを迎えに来てくださることを聞いて、その日がとても待ち遠しく感じているはずですか。パウロが教えるように、また、みことばが言うように、まさにそれは救いに与った者の特徴です。「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」（ピリピ3：20）とパウロは言いました。テトス2：13でも「祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを待ち望むようにと教えたとしたからです。」と書かれています。こうしてイエスが帰って来られるのを待つ、これも救いに与った者の特徴です。

なぜ、私たちはイエスの再臨を待っているのか？ある人たちは自分が今直面している問題から逃れたいから早くイエスが迎えに来てほしいとそのように考えます。でも、私たちが主の再臨を待ち望むのは、イエスが帰って来られたときに、私たちが目標にしている神の栄光が現わされるからです。人々はそれを見るのです。だから、主の栄光が現わされることを願っている私たちは、イエスが帰って来られたときに人々の前にご自身の栄光を明らかに示されるその日を待っているのです。

ピリピ2：10、11を見てください。「:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」「天にあるもの」とは「救われた者たち」のことです。彼らの霊は神の許にあるのです。そして、すでに今神を礼拝しているのです。でも、イエスが再臨されたときには天にあるものすべてが同じようにその礼拝に加わるのです。「地にあるもの」とはだれでしょう？イエスが戻られたときにこの地上にいる人たちのことです。そこには救いに与っている人はもちろん、そうでない、救いに与っていない人も含まれるのです。救いに与っていない人もイエスの前に跪くのです。次に「地の下にあるもの」とあります。これは救われていない者たちのことです。

圧巻だと思いませんか？今、この地上にあって多くの人たちはイエス・キリストの救いのメッセージを聞いてもイエスが神だと聞いてもそれを否定するでしょう。でも、イエスが戻られたときにはすべての人々、救いに与った者だけでなく、主の敵であった者、主に逆らって来た者もすべてがイエスの前に跪くのです。この方が真の神であることに気付かされるのです。この方が約束されていた救世主であることに気付かされるのです。悲しいことは「そのときに救いはない」ということです。でも、その日が約束されているのです。イエス・キリストが帰って来られるときに、ご自身の栄光が明らかにされて、

そして、すべての造られたものはこの方の前に跪いてこの方を拝するのです。だから、私たちはその日が待ち遠しいのです。

今日私たちが見ようとしているルカの福音書17章、ここでイエスは再臨について話されるのですが、パウロ自身もそのことをよく知っているはずです。だから、先に話したように、ピリピ3：20でもテトス2：13でも、キリストの再臨のことを教えたのです。イエスが話されたこと、「主は帰って来られる」、そのことをパウロもまた多くの人たちも知ってそれを待望しながら、その希望を語り続けたのです。

ルカ17章を見ていきますが、ここでイエスは「主の再臨とそのための備え」について教えられました。なぜ、そのことをされたのか？主の再臨について人々が惑わされることのないためにです。この後、見ていきますが、真理を惑わすものたちが時代を越えて出て来たのです。それは、その真理をみな信じないようにと惑わし続けるのです。同時に、この再臨に私たちが正しく備えるためにです。22節には「イエスは弟子たちに言われた。…」とイエスが弟子たちに話されたことが書かれています。17：20を見ると「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。…」とあります。イエスがだれに対して話されているのか、その対象が分かります。20、21節はパリサイ人の質問にお答えになったのです。そして、22節から、今日私たちが見ていく箇所ですが、ここは弟子たちに話されました。

### ☆パリサイ人の質問に対して、イエスは二つのことを教えられた 20-21節

パリサイ人の質問は「神の国はいつ来るのか」でした。なぜなら、彼らはその日がすぐに来ることを信じています。約束のメシヤは必ず来られ、そして、私たちが苦しめているローマに勝利してくれると。悲しいことは、イエスがその約束の救世主だと信じていないということです。そして、そのローマに勝利を得た後、この約束の救世主はこの地上に「神の国」、王国を立てられると、千年王国のことを言うのですが、それを築いてくださると、そのように信じていたのです。

そこで、彼らパリサイ人たちに二つのことを教えたのです。「:20 さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。:21 『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」

#### 1. 再臨のときを人は知ることがない

「人の目で認められる」ということばは新約聖書にはここにしか出て来ないことばで、これは「観察する」という意味です。「目で観察できるように」と、つまり、こういうことです。この再臨の日の到来を人は自分の目で観察することができない、見ながら「ほら、イエスさまが帰って来られる」と、そのようにはならないということです。確かに、聖書には再臨に関する兆候、様々なしるしが記されています。でも、だからと言って、いつイエスが帰って来るのか、その日時を知ることはありません。つまり、突然、思いがけない時に主は帰って来られるのです。そのことを言いたいのです。

ですから、私たちが観察しながら「いついつイエスさまが来てくださる」と、そのようなことはだれも測り知ることは出来ないのです。この出来事は突然起こるのです。『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。」とある通りです。もし、それが言えるなら、主がいつ帰って来られるのかを知ることができるけれど、それはだれにも分からないことだと言うのです。気付いたら、主は帰って来られていたということです。

#### 2. 再臨のときを知るよりも、神の国に入ることが大切

そのことを教えた後でこのように言われました。「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」と。これを聞いたパリサイ人たちは「いったい何のことを言っているのか？」と首を傾げたでしょう。でも、イエスが教えたことは非常に明確です。あなたがたは再臨のときを知りたいと言っているが、それを知るよりも「神の国に入ること」の方がもっと大切だと言われたのです。「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」と言われました。イエスが教えようとしたことは「時期を知ってもそれがどうなるのか？その神の国に入らなければ虚しい。」ということです。

彼らの問題は、神の国が来ることは知っていました。でも、「神の国」と言う以上、そこには「王」がいます。「国」ですから、神が王なのです。ところが、彼らは自分たちの目の前にいて、自分たちが今質問しているこの主イエス・キリストこそがその王であることに気付いていないのです。それで彼らは「神の王国」のことを言うのです。でも、イエスは言われます。「あなたがたは何も分かっていない。知識はもっているけれどすべての聖書が教えている来られるべき王、来られるべき約束の救世主、それがわたしだ」と。こうして、わずかののみことばの中でも、イエスはこのパリサイ人たちにも救いの手を差し伸べておられように見えます。何を考えるべきなのか、何が最も大切なのか、そこにフォーカスを当てるのです。これがパリサイ人たちに対して与えられたメッセージです。

## ☆主が弟子たちに教えられた「再臨」についての六つの真実

今度は弟子たちにはもっと詳細に情報を与えておられます。恐らく、それはパリサイ人たちが心を開いていなかったからでしょう。22節からは弟子たち、イエス・キリストを信じている者たちに対して、主は真理を明らかにしていかがれます。最初に見たように、それによって彼らが惑わされないようにです。それによって彼ら自身がこの日にちゃんと備えを為すことができるためにです。六つの真実がこの中に記されています。再臨に関する六つの真理です。見ていきましょう。

### 1. 将来に訪れる 22節

22節「イエスは弟子たちに言われた。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時が来ます。」、今まで神の国のことを話して来られました。そして、イエスは今度は弟子たちに「人の子」のことを話しておられます。この「人の子」ということばを聞くとユダヤ人たちは何を言っているのかを理解したはずですが。彼らが思い出すべき聖書の箇所はダニエル書7章です。そこには、ダニエルが「幻を見ています、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、」と書かれています。その方が王国を築くのです。7：13、14「私がまた、夜の幻を見ています、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。：14 この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」、ですから、「人の子」と言ったとき、本来なら、旧約聖書のこのみことばをしっかりと思い出して、この方が言われているのは、旧約聖書が約束している「約束の救世主」であり、まさに、王国を築かれる王であるということに気付くはずでした。ですから、主はここで敢えてこの表現を使っておられるのです。また同時に、「人の子」と言ってイエスのご自分に関する表現の一つとしてご自身もそのように呼んでおられます。「人の子」とは人間性を強調します。イエスは「人の子」と言うことによって「わたしは人となった神なのだ」ということを言われたのです。

その上で22節「人の子の日を一日でも見たいと願っても、」と、彼らの願いは主が帰って来られるその日の一部でもいいから見たいという強い願いです。先ほどから見ているように、救いに与っている者はイエスが帰って来られるその栄光ある主の現われを待ち望んでいるわけですから、それを少しでも見たいと願うのは当然です。それに対してイエスは「…見られない時が来ます。」と答えられました。つまり、イエスはあなたがたが何を願っているのかは分かっているが、実際にそれが起こるのはまだ先のことだ、どんなに見ることを経験することを願ってもそれは今は叶わないということを教えられたのです。

今、私たちはそのことを知っています。なぜなら、イエスがこのことを話されて約2000年経っています。まだ、イエス・キリストの再臨は起こっていません。なぜ起こっていないのか？ご存じですね。それは一人でも多くの罪人が自らの罪を悔い改めてこの救いに与るためです。神は忍耐をもって待ってくださっています。でも、その日が来るのです。

最初に、この弟子たちに教えられたことは「再臨はまだ先のことだ」ということです。

### 2. すべての人に明らかになる 23-24節

23-24節では、イエス・キリストの再臨は一部の人に明らかになるのではなくすべての人に明らかになると教えています。

#### 1) にせ教師たちの惑わし 23節

23節「：23 人々が『こちらだ』とか、『あちらだ』とか言っても行っはなりません。あとを追いかけてはなりません。」、こういうことを教える偽りの教師たちが出て来るということです。

#### ・主の日がすでに来たとする教え

実際に、Ⅱテサロニケ2：1-2を見ると、主の日がすでに来たかのように言っている者たちがいることが書かれています。「主の日」、つまり、私たちが今見ている「イエスが地上に帰って来られる日」、再臨のことです。皆さんの頭を整理するために、今言っている「再臨」は「空中再臨」のことではありません。イエスがこの地上に帰って来られる「地上再臨」のことです。ですから、このテサロニケの教会にあって、もうその主の日が来たかのように教えている人たちがいるということです。「：1 さて兄弟たちよ。私たちの主イエス・キリストが再び来られることと、私たちが主のみもとに集められることに関して、あなたがたにお願いすることがあります。：2 霊によってでも、あるいはことばによってでも、あるいは私たちから出たかのような手紙によってでも、主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。」と。

この手紙が書かれたのは大体紀元51-52年です。ですから、イエスが昇天されてからまだ20年も経っていません。もうすでにその時代に、このような偽りの教えをもたらす人たちがいたということです。

#### ・主の再臨自体を疑う教え

また、ペテロの手紙第二には「主の再臨自体を否定するような教え」が入り込んでいたことが記され

ています。Ⅱペテロ3：3-4「:3 まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、:4 次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」と。何も変わっていないし何も起こっていないと言います。そのような人たちがいたのです。

#### ・偽キリストの出現

イエスもこのように言うておられます。マタイ24：5「わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。」と。世の中にそのような人はたくさん出ています。「私が救い主だ」とか「私が救いを与える」とか…。マルコ13：6「わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそそれだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。」、ルカ21：8「イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私がそれだ』とか『時は近づいた』とか言います。そんな人々のあとについて行ってはなりません。」）、つまり、こうしてみことばは惑わされないようにと警告を発していたのです。ですから、この23節で確かに偽りの教師たちが現れて「もうその主の日は到来した。イエス・キリストは再臨された。」と言っていたので、彼らのことばに惑わされてはいけなさと教えるのです。

#### 2) その日が必ず訪れることを約束された 24節

しかも、その日はすべての人に明らかになる！ 24節「いなづまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように、人の子は、人の子の日には、ちょうどそのようであるからです。」、言っていることは「いなづまが光るときそれをみなが見るでしょう。ごく一部の人だけが見えて、後の人は見ようとしても見えなかったということはないでしょう。そのように、主イエス・キリストが戻って来る時はみなそれを知ることになる。」ということです。そのことを主は話されたのです。こうして、自分たちは見た、自分たちだけが見たと、そんなことを言っている人たちに「それは大ウソです。主が帰って来られるときはすべての人がそれを見るから。」と言われたのです。

先にも話したように、イエスが実際に〇年〇月〇日に戻って来られることはだれも知りません。オリブ山に戻って来られることは知っていますが、いつのことか？それは聖書には教えられていないからです。でも、イエスが地上に帰って来られる前にどのようなことが起こるのか？様々な徴だけは記されています。では、それを見たからと言って私たちは「いつなのか？」を推測することはできません。

たとえば、ルカの福音書21章を見ると、「世の終わり」、つまり、イエスが地上に帰って来る前にこのようなことが起こると四つのが挙がっています。21：9-11「:9 戦争や暴動のことを聞いても、こわがってはいけません。それは、初めに必ず起こることです。だが、終わりは、すぐには来ません。」:10 それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、:11 大地震があり、方々に疫病やききんが起り、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現れます。」、

まず、世界的に「戦争や暴動」が起こること、また、「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、」と民族間の争い、国家間の争いはどんどん増していくと。また、「大地震があり、方々に疫病やききんが起り、」、そして、「恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現れます。」と、地上だけでなく天空においてもいろんな変化が生じるということです。

また、マタイ24：8-14、29-30を見ると、「:8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。:9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。:10 また、そのときは、人々がだぜいつまずき、互いに裏切り、憎み合います。:11 また、にせ預言者が多く起って、多くの人々を惑わします。:12 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。:13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。:14 この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。」、「:29 だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。:30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。」

ここにはイエスが地上に帰って来られる前に起こることが五つ書かれています。

- (1) クリスマンへの迫害がどんどんエスカレートする
- (2) にせ預言者がますます現れて来る
- (3) 不法がはびこって人々の愛が冷たくなっていく
- (4) 福音が全世界に伝わる
- (5) 太陽や月、星に変化が起こる

最近のニュースを聞いていてこの聖書の箇所を思い出しました。イザヤ書13：10です。そこには「天の星、天のオリオン座は光を放たず、太陽は日の出から暗く、月も光を放たない。」とあります。「オリオン座は光を放たず、」、多分皆さんもお聞きになったと思いますが、今、オリオン座の一番左上の一等星のペテルギウスがどういうわけが暗くなっているというのです。三日前にはNHKでそのことを放送していました。そこでは50年と言っていましたが、あるものは100年ぶりの暗さだと言います。確か

に、この星は変光星と言われて光が変わるものですが、なぜ、こんなにも暗くなったのかは分からないということです。そういうことを聞くとちゃんと聖書に書かれている、そのようになっていくと思います。特に今回出て来たのはオリオン座の冬の冬の大三角形を形成している一つの星が暗くなったということを知ったときに、この箇所を思い出したのです。エゼキエル書32:7にも「あなたが滅び去るとき、わたしは空をおおい、星を暗くし、太陽を雲で隠し、月に光を放たせない。」と書かれています。こういった前兆があるということです。確かに、聖書にはそのことが記されています。それは何を意味しているのか？必ず、主の再臨があるということです。

### 3) 主の苦しみの後に訪れる 25節

25節「しかし、人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。」と、この再臨が来る前に主イエス・キリストは大変な苦しみに会うと言います。主が受ける苦しみの後に再臨が来るということです。再臨の前にイエスの十字架があるということを使うのです。もう私たちは、イエスがこのように話された後、イエスは十字架をその身に負って私たちの身代わりとなって死んでくださったこと、その死によって私たちに完全な、しかも、永遠の赦しを備えてくださったことを信じています。それがあってその後にこの再臨が起こるということを使われたのです。イエスの贖いのみわざが為されたのです。ゆえに、いつイエスが帰って来られてもおかしくないのです。

使徒の働きからみことばを見ましょう。使徒3:13-15「:13 アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち、私たちの父祖たちの神は、そのしもべイエスに栄光をお与えになりました。あなたがたは、この方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その前でこの方を拒みました。:14 そのうえ、このきよい、正しい方を拒んで、人殺しの男を赦免するように要求し、:15 いのちの君を殺しました。しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。」、3:18-19「:18 しかし、神は、すべての預言者たちの口を通して、キリストの受難をあらかじめ語っておられたことを、このように実現されました。:19 そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。」

### 4) 予期せぬ時に訪れる 26-30節

26-30節「:26 人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です。:27 ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついでりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。:28 また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、:29 ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。:30 人の子の現れる日にも、全くそのとおりです。」

#### (1) ノア 26-27節

皆さんはノアの時代のことはよくご存じでしょう。創世記6章から書かれています。その時はどのような時代だったのか？創世記6:5「【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」、ノアの洪水が起こる前の世界は神に心を開こうとしないで、みな自分のことだけを考えてどうすれば自分の欲を満たすのか自分を楽ませることができるといことしか考えていなかった。神が喜ばれることではなく、神がしてはならないということから自ら進んで行っていました。神が憎んでおられることを愛して行なって来たのです。

その時に何が起こったのか？ここに書かれています。「人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついでりしていたが、」と普通の日常生活を営んでいます。でも同時に言えることは、この人たちの関心は地上のことだけでした。本来なら、彼らは自らの永遠について考えなければいけなかったのです。自分たちを造ってくださった創造主なる神を覚えることが必要でした。でも、彼らはそのようなことは全く考えなかった。そして、そのときに突然、箱舟の扉が閉じるのです。悲しいことに、その後、人々が箱舟の中に入ろうとしてもそれはできませんでした。救いの扉が閉じられたのです。そして、神のさばきが全人類に下ったのです。

#### (2) ロト 28-29節

ロトの時代もそうだったと書かれています。ロトが住んでいたのはソドムという町でした。このソドムが火と硫黄によって滅ぼされるのですが、どんな町だったのか？創世記19章に書かれています。同性愛が横行する町でした。そして、神はそれをさばかれたのです。19:4-11「:4 彼らが床につかぬうちに、町の者たち、ソドムの人々が、若い者から年寄りまで、すべての人が、町の隅々から来て、その家を取り囲んだ。:5 そしてロトに向かって叫んで言った。「今夜おまえのところにやって来た男たちはどこにいるのか。ここに連れ出せ。彼らをよく知りたいのだ。」:6 ロトは戸口にいる彼らのところに出て、うしろの戸をしめた。:7 そして言った。「兄弟たちよ。どうか悪いことはしないでください。:8 お願いですから。私にはまだ男を知らないふたりの娘があります。娘たちをみなの前に連れて来ますから、あなたがたの好きなようにしてください。ただ、あの人たちには何もしないでください。あの人たちは私の屋根の下に身を寄せたのですから。」:9 しかし彼らは言った。「引っ込んでいろ。」そしてまた言った。「こいつはよそ者として来たくせに、さばきつかさのようにふるまっている。さあ、おまえを、あいつらよりもひどいめに会わせてやろう。」彼らはロトのからだを激しく押し

つけ、戸を破ろうと近づいて来た。:10 すると、あの人たちが手を差し伸べて、ロトを自分たちのいる家の中に連れ込んで、戸をしめた。:11 家の戸口にいた者たちは、小さい者も大きい者もみな、目つぶしをくらったので、彼らは戸口を見つけるのに疲れ果てた。」、

この二つの町に関してペテロはこのように言っています。Ⅱペテロ2:5-6「:5 また、昔の世界を赦さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました。:6 また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、以後の不敬虔な者へのみせしめとされました。」、ノアのときに神は人々を洪水で滅ぼした。それはその時の神に逆らい続ける者たちに対するさばきであり、それこそが後の人々への教訓となるということです。神に背を向け続けることは何のプラスにもならない。そこには必ず、自分の罪の清算を自分がしなければなりません。その日が来るからです。

ソドムとゴモラも同じでした。神に対して心を開こうとしない。不敬虔な者たちに対する神の審判が下ったのです。ユダの7節にも「また、ソドム、ゴモラおよび周囲の町々も彼らと同じように、好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、みせしめにされています。」とあります。

ですから、このようなさばきを通して神は何を示されたのか？神は聖い正しい方であり、人間の罪に対しては必ずそれにふさわしい報いを与えるということです。それは歴史が証明しています。そして、今私たちはそのときを待っているのです。必ず、同じように神は今の世界を滅ぼされます。さばきを下されます。

30節「人の子の現れる日にも、全くそのとおりです。」、だれも予期しないときに洪水が襲って来た、だれも予期していないときに天から火が降って来た、予期しないときに神のさばきが下るということです。「人の子の現れる日にも、」と、主がこの地上に帰って来られるときも全くそれと同じだということです。予期しないときに主は帰って来られこのさばきを下されるということです。

再臨に関して、これは将来に起こること、まだ先のことだ。主が帰って来られるときはすべての人に分かる、そして、この主の再臨は主の苦しみの後に訪れる、しかも、予期せぬ時に起こることでした。

## 5. 最も大切なものが明らかになる 31-33節

ここでは「何がその人の宝物か」を問うています。ルカ12:34「あなたがたの宝のあるところに、あなたがたの心もあるからです。」、マタイ6:19-21「:19 自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。:20 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。:21 あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」、

そこで、ルカ17:31からを見ていきます。「:31 その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。」と、何のことを言っているのか？言っていることは分かりますね。屋上にいるときに再臨があった。そのときに自分の家財を取り出すために部屋に入ってはいけないということです。自分の財産や持ち物を取りに行ってはならないと。また同時に、畑にいるときに再臨が起こったなら、家に帰ってはいけないと言います。多分、これは何のことを言っているのかと思われるでしょう。文脈がそれを明らかにします。32節を見てください。

### ・ロトの妻を思い出しなさい

このように書かれています。先ほど見ました。神はソドムとゴモラにさばきを下されます。そのときの出来事を思い出してください。神はさばきがあることを警告され、神はロトとその家族を町の外へと導いていきます。そのときに聖書はこう言っています。創世記19:17「彼らを外のほうに連れ出したとき、そのひとりと言った。「いのちがけで逃げなさい。うしろを振り返ってはいけない。この低地のどこでも立ち止まってはならない。山に逃げなさい。さもないと滅ぼされてしまう。」と。

ところが、ロトの妻だけがうしろを振り返るのです。19:26「ロトのうしろにいた彼の妻は、振り返ったので、塩の柱になってしまった。」、これを見て恐らく皆さんが思うことは「何か大変なことが起こったなら何が起こったのかと振り返ってしまう」ではありませんか？でも、この文脈を見ると、主がこのことばを語っておられるのです。つまり、彼女は「何が起こったのだろう？」と見たのではなかったのです。31節で見た「屋上にいる者が家に家財を取りに行く、畑にいる者が家に帰る」、そのことと関連しているのです。

つまり、31-32節が教えていることは、屋上にいる者がなぜ家に家財を取りに降りるのか？それがその人にとって最も大切なものだからです。なぜ、畑にいる人が家に帰って何かを持ち出そうとするのか？持ち出したいものが自分にとって最も大切なものだからです。ロトの妻がどうしてソドムを見たのか？未練があったからです。彼女の愛するところだったからです。そこに問題があったのです。

なぜ、そう言い切れるのか？33節を見てください。「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、

それを失う者はいのちを保ちます。」と。私たちが聖書を解釈するときその箇所だけ引き出して意味を理解するのは大変難しいです。文脈の中で理解しなければなりません。なぜ、イエスがこんな話をされたのか？屋上にいる人のこと、畑にいる人のこと、言いたいことは、そのときにどこで再臨が起こるのかが問題ではないのです。その後何をやるかが問題なのです。この二人とも家に戻ります。部屋に入ります。イエスが帰っておられるのに…。ロトの妻と同じように…。

彼女はまだ未練があったのです。神が滅ばされた町を彼女は愛していたのです。何を愛していたのかは分かりませんが、神よりも愛するものがあったのです。そこで主は「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。」と言われました。「自分のいのちを救おうと努める者」とはこの世のことしか考えていない人です。この人はこの世で楽しく過ごすこと、自分の思い通りに過ごすこと、そのことしか関心がないのです。その人は「失う」と言います。何を失うのか？永遠のいのちを得る機会を失うのです。その人の関心はこの世のことだけで神のことではないからです。たとえ、自分の欲しいものをすべて手に入れたとしても悲しいことに、最も大切なものを手にすることは不会です。マタイ16：25、26を見てください。「：25 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。：26 人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すするには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」と。このことを話した後、「それを失う者は…」、つまり、自分のいのちを失うものは「いのちを保ちます。」と言われました。

前回、私たちは「救いはあなたにとって最も価値あるものか？」を見ました。同じことが問われているのです。もし、救いがあなたにとって最も大切なもの、神が最も大切なら、その方のために喜んですべてのものを犠牲にします。畑の中に宝を見つけた農夫はどうしましたか？全財産を売ってその畑を買いました。真珠の商人は？最高の真珠を見つけたら自分の全財産を売ってそれを得ようと思いました。つまり、それほど救いは価値があるということです。神が私の罪を赦してください。これだけ神に逆らい続けた私を神はあわれんでくださり、神と和解する機会をくださった。私の罪を負ってイエスは身代わりとなって死んでくださり三日後によみがえってくださり、完全な救いを備えてくださった。それを覚えるときに私たちは「この神を信じたい。たとえ、自分のすべてを犠牲にしても…」と、そこなのです。

だから、私たちが救いを考えるときに問われていることは、「あなたのすべてよりもわたしを愛するか？」です。だから、このみことばは「自分のいのちを失う者は…」と言っています。救われるためには自分のいのちを落とさなければならないということではありません。言われていることは「私は神を愛して神に従っていきたい」ということです。そして、その歩みにおいてもしかするといのちを奪われることがあるかもしれない、「でも、主に従います」と言います。その決心をもって私たちはイエスを信じたのです。

何となく「イエスを信じたなら天国にいけるから信じましょう…」と。恐らく、その人に神への感謝がないことはないでしょう。でも、神が一番ではないかもしれません。イエスが話されたこのメッセージをもう一度聞くと、ロトの妻も神を愛するロトからいろんなメッセージを聞いているでしょう。知識は当然あったでしょう。なぜなら、神はこの家族をあわれまれたからです。でも、彼女はその中で悲しいことに救いを受け入れなかったのです。彼女の関心は神ではなくてこの世だったのです。

「救い」というものが大変難しいとそう思いませんか？皆さん。あなたの生活をそのままにして、あなたの生き方をそのままにただそこにイエスを加えたらいい、イエスを信じたらいいと。そんなものではないでしょう。あなたはわたしのためにすべてのものを喜んで捨てるか？と。それを問うておられるのです。だから、人々は「イエスさま、私はあなたを愛します。私のすべてよりもあなたを愛します。」とそのように決心して従ったのです。

よく私の幼友だちに聞かれます。「おまえはどうしてクリスチャンになったのか？」と。皆さんもそう聞かれるでしょう。「幸せになるから」「病気が治るから」…、そうではない。私がいつも友人に言うのは「これが真理だから」です。なぜなら、私たちは偶然生まれて来たわけではありません。進化して来たわけでもありません。私たちは神によって造られたのです。私たちが造ってくださった創造主なる神を知るといこと、そして、その方は何と私をあわれんでくださって私のために救いをくださった。それが事実だから信じたのです。

よく皆さんも聞きますね。イエスを信じることによって罪の赦しがないとしても信じるか？と。イエスを信じたならあれもこれももらえる、だから、信じよう…。信じて何ももらえないとしてもあなたはあなたを造った神を、唯一真の神を信じるか…と。考えなければいけません。ここでイエスが問うておられることはまさにイエスが語られた福音のメッセージです。「狭い門から入れ」と。広い門から入る人はたくさんいます。でも、悲しいことにその人たちはだれも救われていないのです。救われていると思っっているに過ぎないのです。

ですから、何度もみことばが私たちに問い掛けているのは、「本当にイエス・キリストはあなたにとってあなたのいのちよりも大切な存在か？」ということです。悲しいことに、この31、32節が教えていることは「神よりも愛するものがあつた」ということです。

## 6. 神によって選別される 34-37節

再臨が起これば神によって選別されるということです。34-37節「:34 あなたがたに言うが、その夜、同じ寝台でふたりの人が寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。:35 女がふたりいっしょに臼をひいていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。」:37 弟子たちは答えて言った。「主よ。どこですか。」主は言われた。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」

イエスが帰って来られるときに、人々は二つのグループに分けられるのです。「ひとりを取られ、ひとは残される」と。この出来事は「空中再臨」ではないということを証明します。

・空中再臨だったら… : I テサロニケ4:16、17には「:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一っしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」と書かれています。ということは、イエスが空中に帰って来られたときに何が起こるのか？地上に生きていたクリスチャンたちは天に挙げられ「空中で主と会うのです。」と、つまり、地上からいなくなるのはクリスチャンであって、地上に残るのは救いを拒んでいた者たちだということです。これが空中再臨の出来事です。

そうすると、34節からのみことばには「…ふたりの人が寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。:35 女がふたりいっしょに臼をひいていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。」とあり、これは何のことか？並行箇所を見る必要があります。マタイ24:37-42には今見ているのと同じことが記されています。「:37 人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。:38 洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついたりしていました。:39 そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。:40 そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとは残されます。:41 ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとは残されます。:42 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。」、同じことが書かれています。見ていただきたいのは「洪水」のことです。

先に見た通り、人々は自分の好きなように生きていました。洪水が来ます。そのときに何が起こったのか？39節を見てください。「すべての物をさらってしまう」とあります。その話をした後で40節に続きます。「…ひとりを取られ、ひとは残されます。」とあります。「さらってしまう」と「取られ、」ということばが同じ意味で使っていませんか？箱舟の扉が閉まって洪水が来た、そのときに神に逆らっていたすべての人が「さらわれてしまった」「取られてしまった」、そして、「畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとは残されます。」と。文脈を見たときに、これは何のことを言っているのか？間違いなく、これは関連性があります。そうでなかったら誤解してしまいます。ですから、ルカ17章、マタイ24章で教えていることは、洪水によって人々が取られたように、畑にいて取られるほうが実はさばきのために取られるのです。取られるほうがさばきに会う人なのです。先の「空中再臨」と逆です。

空中再臨でこの地上から取られて主イエス・キリストに会うのは救われた人たちでした。でも、このルカ17章、マタイ24章に出て来た「取られる人たち」は、洪水によって取られた人たち、さらわれた人たちです。さばかれるためにです。ですから、「空中再臨」と「地上再臨」はこのように違うのです。

ルカ17章に戻って、ここで主が言われたことは、主が帰って来られたときにある人は取られるのです。取られてどこに行くのか？ハデスにいきます。最後のさばきを待つところです。そして、残る人たちはどうなるのか？そのまま肉体をもってキリストを王とする千年王国に入って行くのです。でも、主が帰って来られたときに二つのグループに分けられる人たちは、今の私たちではありません。患難時代を生き延びた人たちです。イエスが地上に帰って来られる前に、そのときに生き残っている人たち、患難時代の7年間を生き延びた人たちがこのように二つに分けられるのです。

今、ここにおられるイエス・キリストを信じている方々は心配する必要はありません。あなたは患難時代の前に神の許に引き上げられます。マタイ25:31-34を見ると主が羊と山羊を分けるように彼らをより分けると書かれています。「:31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来る時、人の子はその栄光の位に着きます。:32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、:33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。:34 そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。』、そして、41節「それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。』、羊は

「救われている人たち」を表しています。山羊は「救われていない人」を指しています。そのことがまさにイエスが地上に帰って来られるときに起こるのです。

そのことを話された後、弟子たちはこれらのことを聞いて「主よ。どこですか。」と質問しています（ルカ17：37）。パリサイ人たちは「いつ起こるのですか？」と尋ねました。イエスは「**死体のある所、そこに、はげたかも集まります。**」と答えられました。何のことを言われたのか？「はげたか」は死体に集まって来ます。つまりイエスは、その日には多くの救いを拒んだ者たちの死体があると、多くの人たちがさばきに会うということを言われたのです。悲しい現実です。イエスが教会をクリスチャンを迎えに来てくださった後、7年間の患難時代の中で、そのときに目を醒ましてもいいはずなのに、まだ多くの人々がキリストに対して心を閉ざし続けるのです。こんな私たちのために救いを備えてくださった救世主を拒み続けるのです。そして、地上にイエスが帰って来られたときには羊と山羊とに分けられる。たくさんの山羊がいるということです。たくさんの人々がこの神のさばきに会うということ、そのことを最後に主は話されたのです。でも、このことを通しても、弟子たちに「どこで？」が大切なのではない、そのさばきから逃れることが大切だと教えられたのです。

パリサイ人は「いつ起こるのですか？」と問いましたが、イエスはそれよりももっと大切なことがある、救いに与ることだと言われました。弟子たちも同じことを言います。「どこですか？」と。場所よりも大切なことがある、救いに与ることだと言われました。

まとめます。こうしてイエスは私たちに必ず再臨があるということを教えてくれました。必ずさばきがあるということです。問題は、この日々、大切な備えができていくかどうかです。まだ、イエスの救いを拒んでいる方がおられたなら、あなたはイエスにお会いする備えができていません。罪を心から悔い改めてこの救いに与ることです。そのことによって、あなたは備えができるのです。

救われている皆さんはどうでしょうか？再臨への備えができていくのでしょうか？その備えができていく人は、主の前に信仰者としてふさわしく生きている人です。主のみことばの実践を通して主に喜ばれる日々を過ごしている人です。あなたはそのようにして日々を過ごしておられますか？

イエスは帰って来られる。私たちはそれが「いつなのか？」「どこでなのか？」を探ることではなく、与えられたこの日を神の前に正しく歩んでいくことです。この日を神の前に悔いなく生きることです。しっかり主の栄光のために、神が備えてくださった救いはそれを可能にしてください。その決心をもってこの新しい日をこの1週間を歩み続けてください。